

窪田順平監修／渡邊三津子編

『中央ユーラシア環境史』 3 激動の近現代』

臨川書店 二〇一二・三刊

四六 三〇二頁 二八〇〇円

本シリーズは総合地球環境学研究所におけるイリプロジェクトの成果である。中央ユーラシアの環境変化と人々の生業を対象とした第一巻と露清帝国期を扱った第二巻に続いて、本書は社会主義体制期以降を対象とする。近現代を扱う本書には環境や農業に関する現地調査や社会変容に関するインタビュー調査を活用した論考が多く含まれる。以下章立てにそって内容を紹介する。

第一章「中央ユーラシアの社会主義的近代化」（小長谷有紀・渡邊三津子）は、カザフスタンとモンゴルにおける社会主義体制下の経済変化を比較する。自然条件や開発投資の果たした役割に注目し、穀物栽培中心となったカザフスタンと牧畜業が維持されたモンゴルの間に差異が生じた要因を検討する。

第二章「社会主義体制下での開発政策とその理念」（地田徹朗）はソ連期の中央アジア開発において「自然改造」理念の果たした役割を示し、近代化という観点からアメリカにおける農業・水利開発との比較を行う。

第三章「中央ユーラシア近現代の肖像」は四節よりなり、「社会主義的近代化」の担い手たちがみた地域変容（渡邊）はカザフスタンのイリ河流域でのインタビュー調査をもとに、ソフホーズ・コルホーズの形成と解体の過程を再現し、社会主義的近代化

が地域に何をもたらしたのかを明らかにする。「中央アジアにおける灌漑農業」（清水克之）はイリ河流域の灌漑農業を事例として、水稲―畑作物輪作の問題を分析する。塩害を初めとする現状の問題と今後の農地・水利用における優先課題を示す。「イリ河デルタの地域生態史」（阿部健二）は、人々が過去を評価し意味づける作業を「歴史化」と位置付け、聞き取り調査からその状況を検討する。稲作ソフホーズの解体と再編を分析し、ソ連によって文化・言語・宗教の異なる人々が集住させられたソフホーズを地域から遊離した「異化空間」と捉える。「国境地域における社会主義崩壊とコミュニティ変容」（中村知子）はかつて中ソ国境地域であったジャルケント市での社会主義体制崩壊後の農業の再編とコミュニティの再形成を、個人への聞き取り事例を活用しつつ明らかにする。

第四章「開発と保全のバランスを求めて」は二節よりなり、「中央ユーラシアの土壌と生産生態基盤」（舟川晋也）は中央ユーラシアの土壌状況を踏まえ農耕と牧畜の生産基盤について整理することとで、ソ連期以来の開発の問題点を提示し、農牧のバランスのとれた開発の可能性を示唆する。「乾燥・半乾燥地域の水資源開発と環境ガバナンス」（天西健夫・地田）はソ連期のアラル海とバルハシ湖の開発を自然要因と人為要因の双方から比較し、自然改造理念の変遷が両地域の開発にもたらした影響等を示す。

本書には地域の開発に対して具体的提言に踏み込んだ論考も見られ、中央ユーラシア環境史研究の現代的意義の大きさを示している。本書において示された多様なアプローチは、社会主義体制

下の開発が中央ユーラシア社会に残した影響を考える際に重要な
参照軸となるだろう。
(植田 暁)